

# 監視社会における「幸福」の条件

——「見守られる幸せ」が突きつける問い

阿部 潔\*

## ■要 旨

現代社会では、テロや凶悪犯罪と言ったさまざまなリスクの高まりを背景に、「セキュリティ確保」を目指した監視の動きが高まっている。そうしたなか、人々は監視がもたらす「不自由」よりも安心／安全を優先し、監視強化を歓迎しているように見受けられる。その理由は、「見守る眼差し」として監視が受けとめられているからであろう。そこには、人々が抱く「見守られる幸せ」を見て取ることができる。

だが、こうした「見守られる幸せ」には、監視社会が引き起こす暴力の本質が垣間みえる。なぜなら、安全に安心して暮らせることだけを追求する人々のメンタリティこそが、監視される＝見張られることによって自由や人権を侵害されている「他者」への理解や共感を、徹底的に阻んでいるからである。その意味で、「見守られる幸せ」に潜む暴力のメカニズムを明らかにすることは、監視研究にとって火急の課題である。

こうした問題意識のもとに本稿は、監視社会の「幸福の条件」を批判的に捉え直していくための理論的視座をスケッチ的に描き出すことを試みる。ハーバーマスのベンヤミン論を手掛かりにしつつ、解放された社会における「善き生」の条件について問いかけていくことが、現代社会の監視状況を読み解いていくうえで大きな示唆を与えてくれることを明らかにする。

以上述べてきたように、本稿は監視を批判的に捉えることを目指した研究の出発点として、「見守られる幸せ」に潜む問題性を理論的に検討しようと試みるものである。

キーワード：監視社会研究、幸福と自由、見張る／見守る、無意味なセキュリティ、安穩の政治化

\*関西学院大学

## 1 はじめに

『『人類の幸福に資する社会調査』の研究』を主題に掲げる COE プログラムが始まって、はや一年が経過した。私自身は、主として「監視テクノロジーが市民生活の『幸福』に及ぼす影響」を課題とした研究班での活動を通じて、この壮大なプロジェクトに携わってきた。この度『先端社会研究』の創刊号に寄稿する機会を与えられたことを活かして、この一年間の自分の研究活動における悪戦苦闘を振り返りつつ、監視社会における「幸福の条件」をどのようにして批判的に捉えるべきかについて、私なりの問いを提起してみたい。

## 2 監視社会研究から見てきた「幸福」のパラドクス

私たちの研究班のそもそもの出発点となった問題意識は、およそ以下の通りである。現代社会はますます「監視社会」の様相を強めているのではないか。そうした動向は単にテクノロジーの問題として片付けられるものではなく、現代社会の経済・政治的な動きのなかで理解する必要があるのではないか。そうした「監視」の高まりは、市民の自由やプライバシーを侵害しつつあるのではないか。それゆえ、監視社会において人々は「幸福」を感じていないのではないだろうか。

こうした疑問と問題意識に基づき、私たちの研究活動は進められた。およそ一年が経過した今の時点において、上に述べた問いのひとつを除いて、私たちの直感的な洞察はさして間違っていなかったと思う。つまり、社会における監視化の傾向は確実に高まりつつあり、そこには「セキュリティ確保」に名をかりた経済／政治的な思惑が見て取れる。そして、監視が強化されるなかで、市民社会における基本的な権利が確実に蝕まれている。そうした監視社会の実態をいくらかは明らかにできたと自負している。しかしながら、最後の問いである「人々は『幸福』を感じていないのではないか」との疑問は、ある意味で大きく的を外していたように思えて仕方がない。だが、「的外れ」と言ってしまうのは実も蓋もないので、少

しばかり学術的に「別の可能性を見落としていた」と表現することにした。具体的に言えば、監視社会において人々はむしろ「幸福を感じている」のではないだろうか。研究活動が続けるなかでそうした疑念が、メンバーの共通認識として形成されていったのである。

研究を進めていくなかで、新たな「問い」が生まれることは決して悪いことではない。むしろ、新たな発見のためには必要不可欠な条件であるとさえ言えよう。だが、「人類の幸福」をテーマとするプログラムの一環として進められた監視社会研究のなかで、そもそも「幸福」が人々にどのように受けとめられ／感じられているかに関して大きな壁に直面したことは、名目上とは言え「研究班代表」を務めていた私自身にとっては、胸中穏やかではいられない事態であった。

今さら改めて言うまでもなく、「監視する」とはだれか／なにかを「見張る」ことである。と同時に、それはしばしば「見守る」ことにもなる。同じ「監視する」という社会的な行為がコンテキストによって、疑いの眼差しをもって相手を見張ることもなれば、いたわりの心をもって見守ることもなる。そうした「監視の二つの顔」[Lyon, 2001=2002]が、現代日本社会においても確実に見て取れた。そうしたアンビバレントな監視状況のなかで、人々が抱き感じ取る「幸福」のあり方もまた、一筋縄では捉え切れない複雑な様相を呈している。そうした監視社会における「幸福の条件」が、研究会での議論や関係者への聞き取り調査を通じて明らかになってきたのである。

私たちが直面した「監視社会における幸福」をめぐる「困難」を図式的に述べるなら、以下のように整理できよう。私たちは「監視される＝見張られる」ことの「不自由さ」に主眼を置いて研究をはじめた。そのこと自体はなんら間違っていなかったと、現在でも確信をもって言える。しかしながら、「監視される＝見守られる」ことがもたらす安心や安逸が、どれほどまでに人々にとって魅力的であるのかについての認識が不十分であった。要するに「監視と幸福」の関係を考えていくうえで、「監視される幸福」という私たちの観点からすればパラドキシカルに見える事態が、現実社会においてどれほど「リアルなもの」として受けとめられているかにつ

いての自覚と感受性が、必ずしも十分でなかったのである。

このようにして、はなはだ遅ればせながら一年間の研究活動を通じてようやく私自身は、「人類の幸福」という COE の本題の入り口に至ることができたようである。だとすれば、これからすべきことは、どのようにして「監視される幸福」というパラドキシカルな状況を「批判的」な眼差しをもって論じていくことができるか、という課題に取り組むことである。以下では、そうした監視社会研究の今後の課題に向けて、ごくごくスケッチ的ではあるが自分なりの考えを展開してみたい。

### 3 モデルネにおける真／善／美

社会をあるがままに肯定するのではなく、そこに潜む問題点を指摘することを通して、未来に向けた可能態としての別のあり方（alternative）を模索する言説を、ここでは取り敢えず批判的な研究（critical studies）と呼ぶことにしよう。私たちの研究班の試みは、その意味で「監視社会の批判的研究」である。ところで、そうした批判的研究のひとつの雛形でもあるフランクフルト学派の理論では、解放の理念のもとで社会における真／善／美を実現することが目指されてきた。批判理論の思想潮流では、来るべき／目指すべき解放された社会において真理・正義・美がともに成り立つことが夢見られてきた。フランクフルト学派第二世代の代表的な理論家ユルゲン・ハーバーマスの「モデルネ＝近代」論に従うならば、客観的な自然的世界を対象とする科学における真理性、対人関係的な社会的世界を対象とする道徳・政治における正当性、主観的な内面世界を対象とする芸術における誠実性の三つの妥当性要求が、理性的なコミュニケーションを介して満たされることこそが「解放された社会」の条件とされるのである [Habermas, 1981 b=2000]。

こうした真理／正当／誠実という三つの価値との関連で社会のあり方を捉える発想は、西洋哲学の王道に属するものであり、より具体的にはカントの批判哲学（純粋理性批判／実践理性批判／判断力批判）を踏まえたものである。ハーバーマスは独自のモデルネ論を展開するうえで、近代にお

いて真／善／美がそれぞれ独自の価値領域として自律性を持つようになった事態をとりわけ重要視する。つまり、前近代社会のように宗教的・形而上学的な知識のもとで真／善／美が明確に区別されない「知のあり方」と比較して、それらが分化し独立し、それぞれ別個の論理のもとで発展していく知の体制にこそ、近代に潜む進歩＝解放の契機を見て取るのである。

ここで極めて単純化してハーバーマスの批判理論における「近代知のあり方」の位置付けを概観した目的は、そのことの有効性のみならずその限界や問題点を認識することが、「監視される幸福」というパラドキシカルな状況を批判的に考察するうえで、なにがしかの手掛かりを与えてくれるように思われるからである。監視社会のもとで人々が安穏とした幸福＝「見守られる幸せ」を切望している事態を目の当たりにして、なにを根拠として批判的言説を展開することができるのか。そうした批判的研究の理論的かつ実践的な課題に向けてなんらかの思想的な示唆を得ることを、ハーバーマスの議論を手掛かりにしつつ以下で試みてみたい。

ハーバーマスは現代における批判的な「哲学（彼にとってそれは解放をもたらすものである）」が三つの価値領域との関連で果たすべき使命を、「モビール」の比喩で表している。

そのつどひととの抽象的な妥当性要求のもとで専門化されている知識複合体、専門家の文化として殻に閉じ込められている科学の領域は、いかにして道徳と芸術に対して開かれ得るのか、しかもこの科学の領域は、いかにして、そのもろい頑固さが損なわれることなしに、生活世界のおちぶれた伝統に結びつけられえて、その結果、離ればなれになっていた理性的諸要素がコミュニケーション的な日常実践において結合するようになるのか、という問題である。解釈者として生活世界に眼を向けるという哲学の役割を、わたしは今日むしろ次のようにみている。すなわち哲学は、認識的・道具的なものと道徳的・実践的なものおよび美学的・表現的なものとの静止している合同劇が、ちょうどホックで留められた動く彫刻<sup>モビール</sup>のようにふたたび動き出すのを

助けるのである。[Habermas, 1981 a=1984 : 14]

相互に独立したパーツが、互いに共振しながら揺れる装飾であるモビール。それに喩えて「哲学」に媒介された科学／道徳／芸術の関わりあい論じるハーバーマスの議論は、ある意味で規範的で常識的なものであると言える。また、三つの価値領域が分断されるのではなく、相互に関連を持つ必要性を述べること自体は、西洋哲学の伝統においてなんら目新しいことではない。

だがここで注目したいことは、ハーバーマスのモデルネ論の理路整然さではなく、それが実のところ「揺らぎ」を内包したものであるという点である。別の言葉で言えば、後に『コミュニケーション的行為の理論』として集大成されるハーバーマス批判理論の「終着点」ではなく、そこに至る「プロセス」に見て取れるためらいや戸惑いにこそ、現代社会に対してフランクフルト学派／ハーバーマスの思想が持つアクチュアリティがあると考えている。以下では、そうした「揺らぎ」について、ハーバーマスのベンヤミン論を手掛かりに見ていくことにしたい。

#### 4 ハーバーマスの揺らぎ：意識させる批判／救済する批判

フランクフルト学派第一世代の「異端児」ともいえるベンヤミンを論じたハーバーマスの議論の詳細を論じることが、ここでの目的ではない。本稿での目的にとって必要なことは、コミュニケーション的合理性に依拠してモデルネを再解釈しようとするハーバーマスが、メシアニズムの要素を色濃く持つベンヤミンの言説から、いったいなにを読み取っているのか。そこに、ハーバーマス自身の思想におけるどのような揺れや戸惑いを見て取ることができるのか。その点を明らかにすることである。

ハーバーマスはベンヤミン論を展開していくうえで、批判の形態を二つに分けている。ひとつは「意識させる批判 (consciousness-raising critique)」であり、もうひとつは「救済する批判 (redemptive critique)」である。前者は、典型的にはイデオロギー批判がそうであるように、日常的な

意識において気付かれることなく隠ぺいされている支配構造などを、理性という光のもとで暴露していく批評の試みである。それに対して後者は、理性的な意識覚醒とは異なり、社会において抑圧されがちな情緒的な次元において、人々に「善き生」へと向けた希望の光＝救済を感受させるような批評の実践である。きわめて図式的に当てはめるならば、ハーバーマスの批判的社会理論は前者に、ベンヤミンのメシアニズム的な文化批評は後者に該当するであろう。そして言うまでもなく、自らのコミュニケーション的行為の理論の妥当性を証明すべくフランクフルト学派の先達たちの思想を批判的に吸収しようとするハーバーマスの言説では、最終的には「救済する批判」を「意識させる批判」のもとに統合することが唱えられているように思えて仕方がない。

しかしながら、意識させる批判／救済する批判という二項対立のもとで展開されるハーバーマスのベンヤミン論には、明らかに揺らぎが見て取れる。より具体的に言えば、ベンヤミンのメシアニズム的な唯物論（言語の模倣理論）を語る文脈のなかでハーバーマスは、自らが提唱するコミュニケーション的合理性に準拠した批判理論が志向する社会のあり方に関して、根源的とも言える疑念を漏らしているように思われる。そのことは以下のテキストからも読み取れよう。

ここではただ疑念だけが問題であり、ベンヤミンの意味論的な唯物論が勧める次のような疑念だけが問題である。すなわちわれわれは無意味な解放という可能性を排除してもよいのだろうか。複雑な社会において解放とは、行政的な決定諸構造を共同参加的に変革することである。いつの日か解放された人類は、議論による意志形成の拡大された領域のうちに歩み入るが、しかし彼の生活をよき生活として解釈することのできる光を奪われてしまうということがあり得るだろうか。その場合には、何千年にもわたって支配を正当化するために搾取されてきた文化の復讐は、最古の抑圧が克服された瞬間には、次の点に存しているであろう。すなわち文化はいかなる暴力ももたないが、またいかなる内容ももたないのである。ベンヤミンの救済する批判が関わ

っているあの意味論的エネルギーの供給がなければ、最終的にみのり豊かに貫徹された実践的な議論の諸構造は、荒廃せざるを得ないであろう。[Habermas, 1981 a: 183]

ここで注目すべきことは、ベンヤミンのメシア論的な「救済する批判」のアクチュアリティを論じるなかでハーバーマスが、社会がコミュニケーション的に解放されたとしても、諸個人の内面における「よき生活」を満たすような「意味論的エネルギー」がなければ、それは「無意味な解放」になってしまわざるを得ないことを認めている点である。つまり、「善き生 (good life)」を欠いたような「正義の社会 (just society)」の実現が虚しいものであることを、ハーバーマス自身が明確に指摘しているのである。このことは、多くのハーバーマス研究者が指摘してきたように、その後のハーバーマスの理論展開が、ある意味禁欲的なまでに「善き生」を実体として語ることを避けている点に鑑みると、大変に興味深い。1980年代に論難されることになる「ハーバーマスのコミュニケーション的行為理論は形式主義的であり実体性を欠く」との問題を、皮肉なことにハーバーマス自身が1970年代にすでに吐露しているようにすら見受けられるのである。

## 5 「無意味な解放」のグロテスクな現実

さて私たちは、ハーバーマスのベンヤミン論を経由することで、来るべき社会のディストピア・イメージとして「個人の幸福が満たされない正義の社会」の可能性を知るに至った。そうしたディストピア＝「無意味な解放」を回避する方法論として、ベンヤミンは独自の言語／文化論の立場から「救済する批判」を試み、ハーバーマスは「未完のモデルネ」の完遂に向けて「意識させる批判」を繰り広げる。両者は、個人的で内面的な「幸福」の実現に照準したメシアニズムか、社会的合意形成の実現に重きを置く社会理論かの違いはあるが、ともに「解放された社会」の実現のためには内面世界と社会的な世界との媒介が不可欠であることを示している。逆



にいえば、そうした媒介を欠いた社会は、たとえ見た目には正義が実現されているように思えたとしても、実のところ「無意味な解放」というディストピアに過ぎないのだ。

ところで、1970年代の初頭にハーバーマスが危惧した「無意味な解放」は、現在においてどのようなリアリティを持っているのだろうか。結論的にいえば、そうした危惧は私たちが生きる現代の日常生活において、グロテスクなカタチで現実化されてしまっているのではないだろうか。しかも、全くもって「解放的でない」あり方において……。

ここで私が念頭においているグロテスクな事態とは、「テロとの戦争」を声高に叫ぶ政治指導者たちによって推し進められる、「セキュリティ」を至上命令とする止まるところを知らない監視化の昨今の動向にほかならない。監視社会では、個々人が「主観的に安心」して暮らせるような「客観的に安全」な状態を実現すべく、社会と個人を「見張る」ことが徹底的に追求される。しかしながら、そうした監視化への動きは、「見張られる」当事者たちにおいては、むしろ自分たちを「見守る」眼差しとして歓迎されているようにすら見受けられる。そこでは、個々人の「幸福＝安心」を保障するという約束のもとで、無原則なまでに社会を監視／管理する政策や制度が堂々とまかり通ってしまう。そうした「安全確保」に邁進する社会と個人のあり方は、批判理論が目指してきた「解放された社会」とは正反対のものである。なぜなら、そこでは理性的な議論を通してより多くの人々に開かれた社会的な関係の構築が目指されるのではなく、なかば宗教的に原理主義化された独善的な「正義」のもとで、自分たちとは異なる「他者」を仮借なきまでに排除することが試みられているのだから。しかしそれにもかかわらず、多くの人々が、そうした安全で安心できる状態＝「安穏とした社会」を受け入れている。あたかも自分たちの「幸福」のためには、他者の苦しみや社会における不正義など、まるでどうでもよいかのように……。

このように監視社会の現状を考えていくと、かつてハーバーマスが危惧した「無意味な解放」のもとでの個人の世界／社会の世界との分断状況（いかなる意味論的なエネルギーをも供給しない文化）は、現代において

見事なまでに実現されてしまったとの感を否めない。だが改めて言うまでもなく、監視社会は擬似的にも「解放された社会」とは言い難い存在である。なぜなら、そこでは「セキュリティ」の名のもとに「自由」が容易に制限されてしまうからだ。このように考えると、私たちが生きる現代社会では「無意味な解放」が成し遂げられることすらなく、他者とのコミュニケーションを拒否した独りよがりな「正義」のもとで、個々人の「幸福」の実現が虚しく追い求められているに過ぎないのだろうか。先にみたベンヤミンを論じるハーバーマスの言葉をもじって喩えるならば、そこでは「文化はあらゆる暴力をもつとともに、またいかなる内容ももたない」ことにならざるをえないであろう。

広く知られているように、security という言葉の語源はラテン語の securus であり、それは se (free from) + cure (care) から成り立つものである。つまり、なにごとかに対する関心や配慮から自由であること、別の言葉でいえば「なにごとにも思い煩わされない」状態こそが、security が目指すもののなのである。そのことを思い起こせば、「セキュリティ」が無条件に追求される監視社会において、「安心できる」というささやかな幸福のために、個々人が他者や自らが置かれた社会に対して冷淡なまでに無関心を装うことができってしまうことは、なんら驚くべきことではないのかも知れない。おそらく監視社会の住人たちが強迫観念的に追い求める「セキュリティが確保された状況」とは、なんら他者のことを案じる必要がない「安穏とした社会」なのであろう。そこでは、社会に対しても他人に対しても、そしておそらくは自分自身に対してすら「配慮し気遣う」ことなく、どこまでも透明化された「いかなる内容ももたない」と同時に「あらゆる暴力が許されてしまう」文化のなかで、人々は生きていくことを強いられるに違いない。

もしかすると、もう既に私たちは「見守られる幸せ」を求めるあまり、自らそうした道を歩み始めているのではないだろうか。その先に浮かび上がる来るべき未来の姿は、ベンヤミンが生涯をかけてこだわり続けた「意味論的エネルギー」の重要性そのものがなんら認められない、おぞましい

社会にはかならない。

## 6 「安穩の政治化」に向けて

今こそ私たちは、「安穩とした社会」に潜む無気味な徴候を、批判的に照らし出すことに努めねばならない。冒頭でも述べたように、監視社会批判は「見張り」としての監視がもたらす「不自由」だけでなく、「見守る」監視が約束するかのように見せかける「安心という幸せ」に潜む問題について、粘り強く思考を積み重ねていかねばならない。そのためには「無意味な解放」ならぬ「無意味なセキュリティ」が引き起こす暴力について、私たちの想像力と感受性を膨らませていく必要がある。さもなければ、社会的な不正義と格差に満ち溢れた世界の真っただなかで個々人が果てしなく抱き続ける「安心としての幸福」を前にして、批判的な言説はなんら語るべき言葉を持たなくなってしまうであろう。

ベンヤミンは「国民社会主義」の名のもとに社会変革を唱えたナチズムが「政治の美学化」を推し進めたことに敢然と抵抗して、徹底した「芸術の政治化」の必要性を訴えた。そのことは、「意味論的エネルギー」を散発／解放すべく「救済する批判」に身を投じたベンヤミンにとって、至極当然の言説実践であつたに違いない。それに倣って言うならば、安心／安全の名のもとで「政治のセキュリティ化」がなし崩し的に進行する現代世界における批判的な知性に求められることは、「見張る暴力」と表裏一体となった「見守られる幸せ」に潜むグロテスクなまでのおぞましさを穿つべく、徹底した「安穩の政治化」を行っていくことではないだろうか。

### 文献

東浩紀・大澤真幸, 2003, 『自由を考える』東京: 日本放送出版協会。

Benjamin, W., 1974, "Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit," *Gesammelte Schriften*, Bd. I, Ffm, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1995, 浅井健二郎編訳・久保哲司訳「複製技術時代の芸術作品」『ベンヤミン・コレクション 1』東京: 筑摩書房。)

Habermas, J., 1981 a, *Philosophisch-politische Profile*, Frankfurt: Suhrkamp. (= 1984, 小牧治・村上隆夫訳『哲学的・政治的プロフィール』(上); 1986, 同

(下), 東京: 未來社.)

———, 1981 b, *Die Moderne : Ein unvollendetes Projekt*, Kleinere politische Schriften (I–IV). Frankfurt am Main : Suhrkamp. (=2000, 三島憲一編訳『近代—未完のプロジェクト』東京: 岩波書店.)

Lyon, D., 2001, *The Surveillance Society : Monitoring Everyday Life*, Buckingham and Philadelphia : Open University Press. (=2002, 河村一郎訳『監視社会』東京: 青土社.)

———, 2003, *Surveillance after September 11*, Blackwell : Polity. (=2004, 田島泰彦監修・清水知子訳『9・11 以後の監視』東京: 明石書店.)

# Conditions for “Well-being” in Surveillance Society :

## The Strange Happiness of Being Watched

Kiyoshi Abe\*

### ■Abstract

The levels of surveillance continue to rise in contemporary society as it aims to maintain security in the face of high-risk activities, such as terrorism and violent crime. In the midst of this trend, increased surveillance is seen less as a restriction of individual freedom, with people preferring to prioritize their safety and security and welcome the increased surveillance. The reason is because they see the increased surveillance as protective in nature. Within this new paradigm, it is evident that people are embracing what we term the happiness of being watched.

However, within this happiness of being watched lies the root cause of the violence caused by surveillance societies. The more people desire to live in a safe and secure society, the less understanding and sympathy there is for others who would impinge upon their freedoms and rights through surveillance. In this sense, it is critical to surveillance research that the mechanisms of a descent into violence within the happiness of being watched are clarified.

With this in mind, this paper will critically re-examine the conditions for well-being in surveillance societies, roughly delineating them from a logical perspective. Using Habermas' discourse on Benjamin for clues, we will also consider the conditions for the *Good Life* in liberated societies as we attempt to clarify solutions for modern surveillance societies.

To close, this paper aims to be a theoretical starting point for research into critical perceptions of surveillance, issues that exist in any society where citizens enjoy the happiness of being watched.

**Key words :** studies of surveillance society, happiness and freedom, ambivalence of watching over, meaningless security, politics of security

---

\*Kwansei Gakuin University